

畔上和子 さん/畔上和子 女士

北京日本学研究中心 センター 元日本側事務主任/北京日本学研究中心 原日方事務主任

編集者より：1985年に設立された北京日本学研究中心は、国際交流基金の50年間の歴史の中で最も重要な事業の一つです。同センターの日本側スタッフとして1993年5月から2022年3月まで、29年の長きにわたって勤務され、日本側派遣教授の受入や、学生の訪日研修準備に携わられた畔上和子さんに、これらの業務から垣間見えたセンターの変化について語っていただきました。

北京日本学研究中心の概要については、以下のページからご覧いただけます。

编者按：设立于1985年的北京日本学研究中心，是日本国际交流基金会50年历史上最为重要的事业之一。畔上和子女士作为日方工作人员，自1993年5月至2022年3月在该中心工作了长达29年之久。在此期间畔上女士曾亲自负责该中心对于日方派遣教授的接收工作和学生访日研修的准备工作。在此次访谈中，畔上女士将通过对上述工作经历的追忆，为我们倾情讲述北京日本学研究中心自上世纪90年代至今所发生的点滴变化。

○大平学校から北京日本学研究中心へ（JF50周年記念ウェブサイト）/从大平班到北京日本学研究中心（日本国际交流基金会成立50周年网站）

<https://jpf50.jp/jpf.go.jp/story/platform-of-japanese-studies-open-to-the-world/>

○北京日本学研究中心事業（JF公式ウェブサイト）/北京日本学研究中心事业（日本国际交流基金会网站）

<https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/study/support/bj/index.html>

日時：2022年4月7日

場所：北京市内

使用言語：日本語

聞き手：野口裕子

時間：2022年4月7日

地点：北京市内

使用语言：日文

采访者：野口裕子

（国際交流基金北京日本文化センター）

（北京日本文化中心（日本国际交流基金会））

【目次】

1. 1990年代の北京日本学研究中心
- (1) 北京日本学研究中心との出会いと当時の業務
- (2) 日本からの派遣教授と学生の交流の様子
2. 北京日本学研究中心の変化
- (1) 中国側教師の増加
- (2) 学生の変化
3. 派遣教授の思い出
4. 29年間を振り返って

【目录】

1. 1990年代的北京日本学研究中心
- (1) 与北京日本学研究中心的邂逅和当时的工作
- (2) 日方派遣教授和学生的交流
2. 北京日本学研究中心的变化
- (1) 中方师资力量的充实
- (2) 学生的变化
3. 回忆日方派遣教授
4. 退休之际的感言与寄语

【本文】

1. 1990年代の北京日本学研究中心/1990年代的北京日本学研究中心

(1) 北京日本学研究中心との出会いと当時の業務/与北京日本学研究中心的邂逅和当时的工作

1992年に結婚を機に北京に移住したんですけれども、その後、当時の事務主任でした飛田立史さんと共通の友達がいまして、その友達を介して北京日本学研究中心を紹介してもらいました。

当時、1990年代の初めというのは、日本から一学期15人ぐらい、それに加えて長期派遣の先生のご家族も滞在されていたので、1学期に20名ぐらいの方が北京日本学研究中心の専門家及び家族として滞在していました、一人ではやはりなかなか回しきれないということで、アシスタントを募集されていました。それで、友人が来たことがきっかけでご紹介いただいて、1993年の5月から北京日本学研究中心でお仕事をすることになりました。当時は国際交流基金の派遣専門家としてではないんですけれども、厳安生先生や徐一平先生、当時の中国側の事務主任でした寧民治先生などのご尽力によって、労働ビザを出していただいて、1993年の5月から勤務して、飛田立史さんが離任された時に引き継ぎまして、1996年の3月からは国際交流基金派遣の日本側事務主任として、2022年の3月まで継続していました。

(日本からの派遣教授については、)主任教授と、主任教授補佐——途中から副主任というふうに名称は変わったんですけれども——このお二方については、やはりセンター(注：北京日本学研究中心。以下同。)の中国側の主任、副主任と共にセンターの運営にかかわっていただく必要がありましたので、中国がご専門の先生を国際交流基金が派遣してくれていました。一方、ご講義を担当する先生につきましては、皆さん日本学がご専門で、北は北海道大学から南は琉球大学まで、本当に日本全国の先生がセンターに教員として赴任されてきていました。日本側の先生が1学期間15名ほどいらしたときは、まだ中国側の先生は、歴史を担当されていた先生がお一人いらしたぐらいで、他は全部、日本側の先生でした。

最初のころは、先ほども申しましたように、日本からの派遣の先生、随行家族が多数いらっしゃいましたので、業務は日本側の先生方の生活面でのサポートが中心でした。といいますのが、当時北京はやはり現在ほど便利ではありませんでしたので、その中で学生たちの教育や研究指導を日本と同じようにできるように側面からサポートすることが大切だと思っていましたので、やはり生活面でご苦労のないようにということでサポートすることを心掛けていました。

先生方はとても期待されていらっしゃる一方で、お買い物一つにしても必ず中国語をしゃべらなければならない、今のようにスーパーマーケットがなくて対面でお買い物をしなければいけなかったので、必ず何かを言わないと自分の欲しいものが手に入らない、っていうことで、やはり皆さん、お買い物ができないので、すなわちお食事などにも影響が出るということで、それが一番戸惑われていたように思います。市場に限らず、商店もあったんですけれども、例えば歯ブラシ一つ買うのでも、商品は並んでるんですけれども、そこを指すとか、あれを出してくださいって言わないと買えないような状況でしたので。それをどうすればいいかっていうのが皆さんご苦労されていたようです。

ただ、一カ月ぐらいたってきますと、どういう時にどういえば自分の希望がかなえられるかっていうのを、皆さん学んでこられますので、そういうやり取りをだんだん楽しまれながら、生活をするようになって

ていかれてました。

(2)日本からの派遣教授と学生の交流の様子/日方派遣教授和学生的交流

当時は、先生方の宿舎は友誼賓館をご準備していました。友誼賓館から北京日本学研究中心センターがあります北京外大までは徒歩で30分弱なんですけれども、当時はセンターの方で通勤バスを準備してくれてまして、朝、一コマ目に8時から授業のある先生は7時45分、それから10時10分から授業のある先生は9時30分、午後に授業がある先生は1時40分にその通勤バスに乗ってセンターまでご出勤なさると。帰りも授業が終わった時間に合わせて通勤バスを友誼賓館まで出していました。

だいたい皆さん授業はお一人二科目、(一科目は)50分授業×2コマという形で、それを週に2回ですので、授業としては100分授業が2回ということで、かなり余裕のあるスケジュールではありましたが、そのほかの時間にも学生さんの指導をしてくださったりとか、やはり日本で忙しくされている先生たちが、お時間が空いた分、学生の論文の指導とか、それ以外の研究の指導などにお時間をあててくださっていました。

当時はですね、学生たちは、現在のように出前を取ったりとか外に食事に行ったりということがありませんでしたので、学生は本当に三食、食堂で食事をしていました。それで、お昼は11時半ぐらいに行かないとおいしい食事がなくなってしまうということで、先生にお願いして、午前中の3、4時間目の授業については休み時間を調整して、できるだけ早く授業を終えていただくようお願いしていました。ただ毎回、授業の内容によっては少し時間を長くとりたくなってしまう先生もおおいになりますので、そういった場合は、もう授業が始まる前に先生が、「今日はお昼をごちそうするからたっぷり時間を取って議論しよう」ということで、授業を12時過ぎまでされて、その後みんなでお食事に行ったりしていましたね。あとから学生に聞きますと、そういうところで議論したこととか、先生から教えてもらったことの方がかえって印象に残っているし、研究者になったり教育者になったりした学生にとっては、そこで先生から伺ったお話っていうのが、「当時はよくわからなかったけれども、自分が教員になってみて、胸にすんと落ちた」というような話を聞いています。そういった授業以外での交流の方が学生にとっては印象深かったのかなという気がします。

また、特に奥様を随伴された先生につきましては、学生さんたちを友誼賓館に招待して手料理をふるまってくださったりしていましたね。それからお子さんをお連れになっている先生の場合は、お子さんも学生さんと一緒に遊んだりなどもされていました。

センターは学生数が、現在は30人以上いますけれども、90年代から2000年代の初めにかけては学生数が1学年20名程度でしたので、やはり学生たちの反応っていうのが日本で講義されるのとは違うようなんですよね。本当に小さな教室で、コースごとに4名から5名を対象に講義をしますので、「学生たちの反応が日本とは違う」っておっしゃってました。それから、授業の準備を学生がしてくれる。例えば、美術が専門の先生がいらしたんですけれども、当時はまだプロジェクターとかありませんので、スライドを使われたんですけれども、授業が始まる前にスライドを用意してくれたり、それから黒板を必ず消してくれたりっていうので、先生方は学生さんたちの授業に取り組む熱心さっていうのが日本と比べて違

うっていうのをよく、授業が終わった後にお話しされていました。やっぱり食欲だったようですね。やはり北京日本学研究中心は当時、倍率も高いですから、おそらく学生さんたちは選ばれて入ってきたという意識がとてもあったと思うんですよ。ですから限られた2年半、3年の間に吸収できるものは吸収しようということで、「もうこれ以上授業はとらない方がいいんじゃないか」というぐらい授業を選択している学生さんもいました。

2. 日本学研究中心の変化/北京日本学研究中心的变化

(1) 中国側教師の増加/中方师资力量的充实

(はじめのころは、ほとんどの授業を日本側の先生が担当されていましたが、) 徐々に、中国側の先生も、センターを卒業して博士の学位をとった先生がセンターに戻ってきて、先生として学生の指導にあたってくださいようになってきました。

(センターを卒業して、教師としてセンターに戻ってきた先生は、) 一番早いのは張龍妹先生ですかね。センターを卒業されて、センターに2年ほど外事秘書ということでお残りになって、その後、文部科学省の国費留学生として日本に行かれて、4年後に戻ってきてセンターで授業を担当されるようになりました。その後も、宋金文先生、譙燕先生、それから郭連友先生、丁紅衛先生ですね、皆さんセンターを卒業して日本で博士の学位を取られた後に、再びセンターに戻って、学生たちの指導にあたってくださいっている先生になります。

(中国側の先生が増加するにつれ、) 派遣専門家の人選を考えると、中国側の先生が中心に人選を考えるようになってきましたので、ご自分の研究と少し関係のある先生(に来ていただく)ということで、日本から先生方がいらっしゃいますと、研究上の交流などもされていました。

(2) 学生の変化/学生的变化

90年代ってというのは、現在のようにインターネットとか携帯もありませんでしたので、学生さんは本当に授業が終わった後もセンターの建物に残って本を読んだりレポートを書いたりしていました。唯一の娯楽というのが、建物の一角に学生たちの活動室というのを準備して、卓球台を置いて、勉強に疲れたらそこで学生同士で卓球をしたり。それから、古いテレビを置いてましたが、当時、テレビでNHKのBS2が見られましたので、BS2でニュースを見たり、日本のドラマを見たりして日本語を勉強していました。今でも学生たち、卒業生ですね、そのことを覚えていてとても懐かしく話しています。

だんだん進んで2000年になってきますと、携帯電話が出てくるんですけども、やはりインターネットが本当に普及する前ってというのはみんな本当に勉強中心の生活でした。その後、現在になってきますと、インターネットもだいぶ一般的になっていますので、図書館で勉強するよりはネットで検索したり、それからこれだけ中国社会も変わってきていますので、携帯電話代を支払ったりとか、それからおしゃれもしたいしってということで、今、本当に授業が終わった後は、勉強もするけれども、おしゃれをするお金とかが必要になりますので、翻訳のアルバイトをしたりとか、就職のためにインターンシップに行ったりなどと、勉強だけだった生活から少し、また違ったものが加わった、今の本当に現代的な中国の若者という風にセンターの学生も変わってきています。

(訪日研修の準備についても) おそらく90年代ぐらいまでは、メールもありませんでしたので、学生

が日本側の先生と連絡をとる術がありませんでしたので、学生さんに自分が受け入れてもらいたい先生を挙げてもらって、国際交流基金のセンター担当だった職員の方々が、先生方に連絡を取ってくださっていました。ですから本当に当時の手続ってというのは国際交流基金の方にかなりご迷惑をおかけしてお手伝いいただいて進めていたという状況です。

その後は通信も進みましたし、学生たちが先生たちの連絡先を自分たちで調べられるようになりましたので、手続を学生主体で進めるように変更しました。ただ、やはり大学によっては、どんな身分で受け入れるかとか、「北京日本学研究中心っていったいどんなところなんだろう」というようなご質問をされる大学もありまして、そうしますとやはり学生には任せられないので、センターの日本側の事務の方で、先方の大学の国際交流担当の方と連絡を取ってやり取りをして、ということも多々あります。

3. 派遣教授の思い出/回忆日方派遣教授

東京大学名誉教授の平川佑弘先生、日本文化がご専門で、2回ほどセンターに来てくださったんですけども、2回目が1998年の春学期だったと思います。やはり名誉教授ですので、かなりご年配の先生ではあるんですけども、奥様とご一緒にいらして、奥様がせっかくのチャンスだからということで、留学生のコースに入って中国語を勉強されていたんですよね。それを見て平川先生も、自分も勉強したいということで、講義のない時間を使って留学生のコースに入って中国語の勉強をされていました。当時、平川先生と同じお部屋で主任教授補佐をされていた東京大学の高見澤磨先生、それから、もう一人やはりご専門が近い先生がいらして、かなりお二人とも若手の先生だったんですけども、平川先生に宿題を出されたりしていたんですよね。「これをいつまでにやってきなさい」という感じで。ところが中国語に関しては、私の所に平川先生が、「こんな作文をしたんですけどもいかがでしょうか」なんて持ってらして、それを私が添削したりなんかしていますと、その宿題を出された先生たちが「そんなことできるのは畔上さんだけだよ」といって、驚かされていたのが今でも印象に残っています。

あとは、皆さん、お出かけになる時はやはり交通が、日本とやっぱり交通ルールが違うといいますが、横断歩道を渡るときに、「日本でしたら左を見て右を見ますけれども、中国でしたら右を見て左を見るんですよ」、とか、「信号に関係なく車が来ることありますから交通には十分気を付けてください」とか、「ちょっと慣れてきますと気を抜く時があるので、そういう時に盗難とかお気を付けてくださいね」なんて、そういうことをよくお話しさせていただいていたんです。けれども、皆さん、滞在されている時は何もおっしゃらないんですけども、最後に離任される直前に歓送会を開いた席で、「そういう風に注意されていたにもかかわらず、観光に行ってハンバーガーを食べるときに、ちょっとこうやって体を前に向けた隙に後ろにおいてた荷物を取られたことがありました」、というような、そういった小さなトラブルに遭遇する先生が何人かいらっしゃいました。やっぱり皆さん、心配をかけないようにということで、黙っていてくださるんだと思うんですけども。

野村浩一先生も、よく一人でふらっとお出かけになるんですよ。はじめは「どこにお出かけになるのかな。」って思ってたんですけども、外大の近くにシャングリラホテルってあるんですけども、考え事をされたり原稿をまとめるときは、そこにコーヒーを飲みに行ってそこで手書きで原稿を書かれてるってということが、ありまして。それをお持ちになって、これをパソコンで打ってくださいっていうようなこ

とを頼まれたことが何度もあります。

そうやって考え事をされると、どうもお時間を忘れてしまうみたいで、お一人でセンターに残ってお仕事をされていることもありまして。当時、野村先生、自転車で通勤をされていたんですね。夕方6時から7時ぐらいだったと思うんですけれども、突然お電話をくださって、「カバンを盗まれてしまいました」と。車輪にリボンか何かを巻き付けられて、それを取ろうとしている時にかごに入っているカバンを取られるっていう、そういう手口の盗難が当時はやっていたんですけれども、それに巻き込まれたようで、カバンを取られてしまったんですけれども、「明日の授業のノートが入っているので何とか取り返してほしいです」というようなことをおっしゃって。そういう時に普通でしたらね、「貴重品が入っているので困ります」とか言うところなんですけれども、野村先生は「授業のノートがないと困ります」ということで、「ああ、この人は本当に根っからの研究者なんだな」というのをその時に感じたのを今でも覚えています。そのかばんは、見つかりました。おそらく金目の物が何もなかったようで、そのまま駐車場に置き去りにされていて、駐車場の管理会社の方がお電話してくださって、無事に、授業のノートも含めて全部野村先生の元に戻りました。

センターの建物は、野村浩一先生の派遣が二年目に入ったところで建物のお話が決まったんですけれども、当時、主任教授の補佐をされていた愛知大学の砂山幸雄先生が、メジャーを持って建設予定地まで測りにいらしてたんですね。とても普通のメジャーじゃ測れるような大きさではないんですけれども、私たちにとってはそれほど嬉しい大ニュースで、建設「予定地」ということで、まだ確実にそこに建設されるということが決まっていたわけではないんですけれども、メジャーを持って行って、「これであればこの程度の建物ができる」とかっていう、みんな心がうきうきして話をしていました。で、最終的には、そこはちょっとセンターには土地が面積が大きすぎるということで、別の場所になってしまったんですけれども。

その前のセンターの建物は外大の西院にありました。今、東院到北京日本学研究センターがありますけれども、当時は北京外大の西キャンパスにありました。3階建ての古い建物だったんですけれども、1階は図書館、2階に中国側の事務スペースと、それから日本側の主任教授室、事務室、それから日本側の先生たちの職員室のようなものなんですけれども「日本人専室」、それから、図書館がありまして、3階が教室と、それから先ほどお話しした学生の活動室というのがありました。本当に古い建物でして、トイレもドアの下の方が空いているのかな、日本からいらっしゃる女の先生がどうしてもやっぱりそのトイレには入れないってことで、野村先生が大学に掛け合ってくださいまして、日本側の先生用にトイレを改修してくださったっていうことがあります。

4. 29年間を振り返って/退休之际的感言与寄语

日本研究というか人材育成なんですけれども、よく日本側の先生たちが、「人材育成っていうものはすぐに結果が出ないものだ」ということをおっしゃってたんですよ。本当に、働き始めて10年、20年ぐらいいっているのは、本当に、目で見てわかるような結果っていうのは伴っていませんでした。で、ここ30年、センター設立して20年目の後半から30年目に入るぐらいで、センターを卒業した学生が他大学に就職して、それでその人たちをセンターの客員教授として招いてセンターで授業をしたりとか、センターを卒業した学生が教員になって、教え子たちがセンターに入学するっていうようなことが、ここ数年



増えてきまして、「ああやっぱり、先生たちがおっしゃっていたけれども、すぐに結果は出ないけれども、やっぱりこうやって国際交流基金と、それから北京外大で共同運営してきたこの北京日本学研究中心の人材育成っていうものが、着実にこう、実になってきたな」っていうのを29年間見ていて実感しています。

今回（退職にあたり）、学生にもちょっとメッセージを残したんですけれども、やはりここ2年はみんなコロナの影響を受けて訪日研修が実施できなかったり、日本側の先生から直接授業を受けられなかったりということで、本来、学生さんたちは、やっぱりセンターに入学するのは日本人の先生の授業を受けられる、それから訪日研修に行くチャンスが与えられるという、その2点があるからセンターに入学するっていう学生が大部分だと思うんですけれども、その二つの夢がむなしくも、実現できなくて非常に悔しい思いをしていると思います。ただ、悔しい思いはしていると思うんですけれども、おそらく10年ぐらいたったところで、あの時はこんなだったけれども、でもその中でも自分たちで頑張ったものはたくさんあるっていうのが感じられると思いますよ、というメッセージを残しました。実際にそうなるってほしいなっていうのが希望です。

公開：2023年3月2日

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容